

吉蔵『仁王經疏』について

——釈二諦品・「三種仏性説」を中心に——

小 菅 陽 子

はじめに

吉蔵の代表的仏性説としては「五種仏性」説が知られるが、初期著作『仁王般若經疏』（以下『仁王經疏』と略す）には現常・当常・了因の三種仏性説が説かれ、この名目による仏性説は吉蔵の他の著書には現れておらず、またこの問題に言及した研究も管見の及ぶ限り見当たらない。以下にこの吉蔵『仁王經疏』『三種仏性説』の源泉等の問題を明らかにする。

一、吉蔵『仁王經疏』における「三種仏性説」

『仁王經』二諦品を釈して吉蔵『仁王經疏』は以下の如く述べる。

明三種佛性。初現常佛性、二當常佛性、三了因佛性。…初現常、文言、「如如文字修、諸佛智母。一切衆生性、根本智母即為薩婆若體」者。以前聞十二部經如故、知文字即是如。如即是波若、波若為佛母、故云智母。言「一切衆生性、根本智母」者、知衆生性

不可得即如。故云、「即為薩婆若體」、達解衆生與薩婆若不一不二。何當何現、破當故説現耳。「諸佛未成佛」下、第二明當果佛性。何以得知。文云、「諸佛未成佛、當佛以為智母、未得為性」。故知、當有非現有。…「已得」下第三明了因佛性、明三乘波若了出「不生不滅」、以得波若正觀體、知生者「不生」、滅者「不滅」、故云、「自性常住」。(同 34a-b)

右によれば「現常」仏性とは現実態としての薩婆若、「當常」仏性とは衆生にあるときの仏性すなわち可能態としての仏性の相、「了因」仏性とは仏性を開発する智慧を指すものと考えられる。

二、用語の源泉

①『涅槃經』師子吼菩薩品

三仏性のうち「了因」の源泉としてまず挙げるべきは、仏性の因について述べた南本『涅槃經』師子吼菩薩品の以下の記述であろう。

因有二種。一者生因、二者了因。能生法者是名生因。燈能了物故名了因。煩惱諸結是名生因。衆生父母是名了因。如穀子等是名生因。地水糞等是名了因。(T12.774c)

衆生佛性亦二種因。一者正因、二者緣因。正因者謂諸衆生、緣因者謂六波羅蜜(T12.775b)

これら「生因」・「了因」、「生因」・「緣因」という二種の範疇は内容的に大差なく、「了因」と「緣因」はほぼ一致するものと考えられる。即ち吉蔵の三種仏性説の記述において「了因」は智慧とされているが、『涅槃經』における記述に即せば智慧・修行のどちらとも取りうる。

②真諦訳『仏性論』

真諦訳『仏性論』に、如来蔵を所摂蔵・隱覆蔵・能摂蔵の三種に解釈する部分があるが、第一の所摂蔵を述べた段に次のような記述が見られる。

言來者、約從自性來、來至至得。是名如來。故如來性、雖因名應得、果名至得。其體不二。但由清濁有異。在因時為違二空故、起無明、而為煩惱所雜故名染濁、雖未即顯、必當可現故名應得。若至果時、與二空合、無復惑累、煩惱不染、說名為清、果已顯現故名至得。(T31.795c-796a 下線筆者)

『仏性論』における三種仏性説については後述するが、ここで「至得(性)」「仏果が顯現した状態」の未開発の状態が「必當可現」と記述されていることに注目したい。

また、つづく第二の隱覆蔵を述べた部分、

言如來者、有二義。一者現如不顛倒義。由妄想故名為顛倒、不妄想故名之為如。二者現常住義。此如性、從住自性性來至至得、如體不變異故是常義。(T31.796a、下線筆者)

と、如来の屬性を「現常住(義)」とする。また、文中の「如」「常」は、前の所摂蔵の段の引用文で言えば「果」に当るものと考えられ、これらの言葉の用いられたのは一で挙げた吉蔵『仁王經疏』における記述と類似する。以上から、『仏性論』のこの辺りの記述を合採し、例えば「當可現(常住)」・「現常住」を下敷きとして吉蔵が「當常」・「現常」の語を用いた可能性を想定しうる。また「了因」の語も『仏性論』に見られる(T31.798a)。この真諦訳『仏性論』は、『宝性論』に依拠しつつ真諦の解釈がかなり入り込んだ著作であるというのが現在のところの定説である。すなわち、吉蔵疏における三種仏性の名目は、一応すべて真諦訳『仏性論』に原型が用意されていることを確認しておく。

三、三カテゴリーの源泉

①真諦撰・金光明經疏における三種仏性説

吉蔵『金光明經疏』は、天台『金光明經玄義』等と比較すると明らかなように、明示せずに真諦撰・金光明經疏(逸書)の解釈を引く部分が多く見られる。この吉蔵『金光明經疏』

において『仁王經疏』とは名目の異なる三仏性説が説かれるが、天台『金光明經玄義』（T332a）と比較対照すると明らかに真諦説の引用である。すなわち、

第三、表三種佛性者、金體本有、如道前正因、光用始有、如道内了因、明是無闇、如道後至果。（T3316b）

この三カテゴリーを吉藏『仁王經疏』の三種仏性説と比較すると、内容的に「正因」が「當常」、「了因」はそのまま「了因」、「至果（縁因）」が「現常」にそれぞれ対応する。

②真諦訳『撰大乘論釈』『乗の三義』並びに『仏性論』三種仏性説

真諦訳『撰大乘論釈』が吉藏の經疏において最も頻繁に引用される部分は、「乗」の体を①因（性）②縁（隨）③果（得）の三義において論じる説である。これは『撰大乘論釈』巻十五の記述（T3126c）のアレンジであり、他の漢訳には存在しない真諦訳のみの内容である。

また、『法華玄論』一乗義においては、

此猶是三種佛性義耳。乘縁謂引出佛性即了因也。乘體謂因佛性。

乗果謂果佛性。（T34391a）

と、「乗の三義」に「三種仏性義」を組み合わせた説が見られる。上の「引出佛性」等の「三種佛性義」とは、2に既出の真諦訳『仏性論』に見える説である。すなわち、『仏性論』において仏性の体を説き、

三種者、所謂三因三種佛性。三因者。一應得因。二加行因。三圓滿因。應得因者。二空所現真如。由此空故。應得菩提心。及加行因。乃至道後法身。故稱應得。加行因者。謂菩提心。由此心故。能得三十七品。十地十波羅蜜。助道之法。乃至道後法身。是名加行因圓滿因者。即是加行。由加行故。得因圓滿。及果圓滿。……三種佛性者、應得因中具有三性、一住自性性、二引出性、三至得性。（T31794a、下線筆者）

とあり、ここで「三種仏性」は「三因仏性」中の「應得因」に含まれるものとして示されるが、内容的に見て「三因仏性」・「三種仏性」は枠組みとして同様のものと見られ（T31795c・808b・808c等）、また上述の『撰大乘論釈』における「乗」の三義（性・行・果）とも合致するものと思われる。すなわち吉藏『法華玄論』一乗義の記述は、『仏性論』における三因仏性・三種仏性ならびに『撰大乘論』『乗の三義』を組み合わせ解釈したものであり、これらと吉藏『仁王經疏』の三種仏性説を比較すると、概ね内容が一致する。

四、吉藏における「三種仏性説」の位置づけ

また「乗の三義」と「三種仏性」を組み合わせた吉藏『二門論疏』の以下の記述は注目される。

攝大乘論明、乘有三。一者性乗謂真如。二隨乘即萬行。三得乘謂佛果。此三猶一體、但約時故分三。即是三種佛性義。性乗謂自性

住佛性。隨乘謂引出佛性。修於萬行引出因中佛性。三果乘則果德佛性。此三佛性、釋涅槃經甚精。是故涅槃經、或時明佛性是果、或時明是因、或明佛性是空。此論正釋於空。則是釋根本佛性。故涅槃云、佛性者名為一乘。今既釋一乘即釋佛性。問、三論但明空義。正可釋於大品、云何解佛性一乘。答、三論通申大小二教。則大乘之義悉在其中。豈不明一乘佛性。(T42.177a-b)

ここでは〈空〉を基盤とするとき「一乘」と「仏性」とがリンクすること、そして三論もこの「一乘仏性」を明かしていると言われつつあり、「一乘」と「仏性」の三にしてい、一にして三の相即關係を簡潔に示すことを通じ三論が『涅槃經』同様「一乘仏性」を説くことを示す趣旨が明らかである。すなわち、吉蔵における「三種仏性説」(あるいは「乗の三義」)は、一面において三論あるいはそれが依拠する『般若經』が「二乗仏性」を説くことを根拠づける役割を担っているということになる。

以上を踏まえると、吉蔵が般若經典『仁王般若經』二諦品を、「如」にして「不二」の「性般若」(同32b)すなわち「般若の真性」(T8.82b)を説くものと把握しつつ、それに対し「三種仏性説」の形式をもって解釈することから、この『仁王經疏』「三種仏性説」に、般若と仏性を結合させるという吉蔵の根本的意図を見ることが可能ではないかと考える。

まとめ

吉蔵の初期著作『仁王經疏』二諦品釈においては「現常」「当常」「了因」の名目による「三種仏性説」が見られ、その源泉として『涅槃經』師子吼菩薩品と並んで『仏性論』『撰大乘論釈』等真諦の論書を想定しうることが知られた。吉蔵における真諦の影響については従来指摘されていたが、本論の考察もそれを裏づけるものとなったと言えよう。『十二門論疏』等の記述に依れば、「三種仏性説」には『般若經』ないし三論が「一乘仏性」を説くことの経証の機能を担う側面が見られ、それを踏まえて考えるとき、般若經典に仏性解釈を施した吉蔵『仁王經疏』の「三種仏性説」には般若と仏性を融合するという吉蔵の根本動機を窺い知ることができよう。

(紙幅に制限があるため注は省略するが、ただ以下の点のみ付記したい。天台も「三因仏性」を説いたことが知られるが、その内容は①正因仏性(仏性の理)②了因仏性(仏性を開発する智慧)③緣因仏性(その開発を資助する修行)というものであり、吉蔵の三種仏性説においては「了因」に収められていた「智慧」と「修行」を二つに開いた上で「果」は説かず、吉蔵の示した三範疇とは異質のもののように思われる。)

(キーワード) 『仁王般若經疏』、三種仏性説、般若と仏性の融合

(東京大学大学院)

plained *bīja* as the essence of discipline based on a Mahāyāna text, namely the *Mahāyānasamgraha*.

108. On the Threefold Classification in Jizang's *Renwang bore jingshu*

Yōko KOSUGA

Jizang (吉藏), in his *Renwang bore jingshu* (『仁王般若經疏』), proposed a new theory about Buddhadhatu (仏性) which asserted the three kinds of Buddhadhatva, i.e. xianchang-foxing (現常仏性), dangchang-foxing (當常仏性), and liaoyin-foxing (了因仏性). His aim seems to combine the idea of Prajñā (般若) with Buddhadhatu. The source of his new theory, I suppose, can be found in the *Foxing lun* (『仏性論』) and *She dacheng lunshi* (『攝大乘論疏』) of Zhendi (Paramārtha 真諦), as well as the Shizihou pusa pin 師子吼菩薩品, a chapter of the *Mahāparinirvāṇa-sūtra* (『涅槃經』).

109. The Bodhisattva Precepts in Xuanzang's Translation of the *Pusajie jiemo wen*

Makoto YOSHIMURA

The *Pusajie jiemo wen* was translated by Xuanzang in 649. Although it is widely thought to have been produced from the *Bodhisattvabūmi* of the *Yogācārabhūmi*, this is not strictly true. The *Pusajie jiemo wen* was a reorganized text of the *Yogācārabhūmi*. The text was reorganized in order to use it in the actual ritual of receiving the precepts.

Xuanzang held great interest in the bodhisattva precepts. When he visited India, he entreated his master, Śīlabhadra, to give the precepts to him, though he had already received them in China. It is likely that the reorganized ritual in the *Pusajie jiemo wen* reflects Xuanzang's experience in India.

Upon his return to China, he often gave the bodhisattva precepts to the ministers of the Tang dynasty. Xuanzang believed that it would help increase their support towards Buddhism.